

20年間の文化行政の取組み

嶋田正義



I. 辻川界限を

中心にして

1995年12月18日から2015年12月17日までの20年間、町長として役場に勤めました。

これからの20年といえませんが、過ぎ去った20年はアツという間でした。

福崎町は柳田國男五兄弟、吉識雅夫、岸上大作、松岡義之など文化・スポーツで優れた人材を生み育てました。

2万人弱の小さな町ですが文化勲章受章者 柳田國男、吉識雅夫の2

名を名誉町民に持ったことは大変な誇りであり、大いに自慢していいと思っています。

福崎町第5次総合計画のまちの将来像は「活力にあふれ、風格のある、住みよいまち」となっています。優れた先輩を持った幸せをしっかりと胸に持ち、その業績を受け継いで更に伸展させる思いで「風格のあるまち」づくりを目指していきます。

1. 情報公開と職員の資質の向上

町政運営で何が大切かと問われれば、迷うことなく、情報公開と職員の資質の向上と答えることにしています。日本国憲法は、国民こそ政治の主人公と主権在民をしっかりと明記しています。主権者である町民に役場を持つている情報をオープンにすることは当然のことです。知識や情報を共有してこそ町民からのいい提案が生まれると思います。

住民サービスの向上とよくいいますが、その担い手は町の職員です。町職員の資質が向上すれば、きつとサービスも向上すると思います。

2. 弁証法的に考える

私は職員教育の中で哲学の学習を重視しました。私は自分自身に、哲学、歴史の勉強を課していますが、職員にも同じことを求めました。中でも弁証法的なものの見方、考え方についてよく話をしました。

弁証法的な見方は、事象を動きの中で理解することであり、ものごとは関連の中で見ることです。

今日の福崎町は昨日までの歴史の積み重ねによって形作られているのです。明日は今日よりも良い福崎町にしていこうと考えることです。福崎町は決して孤立しているのではなく、上下左右の関係の中で生きていることを常に意識することが大切です。国政や県政との関係、市川町や姫路市とのつながりの実態を深く見きわめることで、福崎町をより鮮明に知ることができるようです。

3. 量的変化から質的变化へ

より高い質へと発展させるためには量的変化の努力を積み重ねないと達成できないことを弁証法を学ぶ上で理解しました。

その例を辻川界限のまちづくりを例にとつて書きますと、次のようになります。

辻川界限は福崎町の文化行政を進めていく上で、大切な場所であるとの認識で早くからいろいろの取組が進められています。

柳田國男・松岡家記念館の運営、郡役所や柳田國男生家の保存などは、その代表的な例です。

しかし、今のままでは、福崎の文化の中心地、観光地として世に問うことには、さみしさがありません。どうすればいいのかと考えると、柳田國男兄弟の功績、三木家、辻川山、鈴木森神社などを活用する地産地消で、まずは量的変化を促進することが考えられます。

そうした思いで取り組んだ事業を思いつくままに列記しますと、次のようなものがあります。

思い出に残る辻川での事業

① もちむぎのやかたの存続

20年間、片時も気が抜けなかったのが、もちむぎ食品センターと、もちむぎのやかたの運営です。

「町長になってほしい」と要望に
来られた人たちの三つのお願いの
一つが「もちむぎ食品センター運営
改善」でした。町長になって調べて
みると、事務職による3億7800

万円の不正経理が発覚しました。被
害額が大きいので、廃社の声が多数
でしたが、私は存続の声を支持し
ました。ただちに存続の立場から

専門家を交えた検討委員会を設置し
答申を出していただきました。それ
以来、今までこの方針にそって運営を
続けてきました。私の経営力の不足
によって再建が遅れています。今
年度は利益が出る会社として引き渡
しすることができました。

② トイレの建設

「トイレは文化」と私はいつも
思っています。

そして、集客を考えるなら、トイ
レは避けて通れない課題でした。

町幹部会で取り上げてもらい建設

することになりました。課長は休日

も利用して各地のトイレをまわって
立派な設計図を描いてくれました。
議会委員会に諮ると、立派すぎると

クレームがきました。これから
はいいトイレが必要だと説明し、
トイレの必要性は認めてもらいま
したが、かなり設計額は縮小され、
今のトイレとなりました。私は今も
残念な気持ちを持っています。

トイレはこのほかにも、福崎駅
広場、文珠荘の下、第一グラウンド横、
七種山（バイオトイレ）等に作りま
した。

観光客や町民に町内を散策して
楽しく健康的な一日を過ごしてもら
うためにも、トイレは必要でしょう。

③ カツパの出没

今、全国的に辻川山の麓の小さな
池のカツパが人気となっています。

この池は水が濁っていて泳いでい
る美しい魚の姿が見えません。透明
度を高めるために、いろいろと努
力してもらいましたがだめでした。

考えを変え、逆転の発想で濁ってい
ることを利点にしようと思い、隠れ
ているカツパを出没させては、とい

うことになりました。

町職員が知恵を出し合い、たくさ
んの人の力を借りて、試行錯誤を
しながら作ってくれたのがカツパの
装置です。そして、カツパの姿を
かわいいうつくちゃんのような姿か、

妖怪風の怖い姿にするかで議論が
あり、私が決めることになりました。
柳田國男の『故郷七十年』に出て
くるのは、いたずらをするカツパな
ので、怖い方に旗を上げ、今に至っ
ています。

間もなく天狗も出没すると聞いて
います。楽しいことです。

④ 学問成就の道

辻川山の南面に鈴ノ森神社、北
東に北野の天満神社があります。

鈴ノ森神社は柳田國男兄弟が幼
少の頃、木登りや狛犬に乗って遊
んだところであり、天満神社は学

問の神様の菅原道真を祀っているこ
ろです。この二つを道でつなげて
お参りすれば、きつと御利益がある
のではないかと考えました。教育委
員会が中心になって構想を練り、柳
田五兄弟の胸像を配置するなどして、
立派な「学問成就の道」が完成しま

した。

きつといい名所となり、学問の
向上や合格を願う人々で賑わうだろ
うと期待をしています。

⑤ 岸上大作望郷の丘

岸上大作は福崎町に生まれ、福崎
高校から國學院大學に進みました。
私よりは3歳下で同じ高校に学び
ながら面識がありません。残念な
ことです。高校時代から、全国的な
歌壇で認められ将来を嘱望されて
いましたが、安保闘争の最中、自ら
命を絶ち帰らぬ人となりました。

辻川山の山頂で、彼のお墓や今は
なき生家を見下ろす位置に、この丘は
作られています。

⑥ 三木家の購入と大改修

大庄屋三木家は辻川文化の中心的
役割を果たし、今も三木家を除いて
福崎の文化を語ることはできません。
三木家を保存し後世に渡していく
ことは大切な仕事と考えました。

土地を購入し、約2億円と5年の
年月をかけて、一期工事が今年度
完了する予定となっています。平成
29年度からは三木家を活用した
多彩な行事が展開されることになり

ます。

たくさんの方費用を使わせていただいたことに心が痛みますが、きっとそれに勝る効果が生まれるのではないかと楽しみにしています。

⑦ 遠野市との友好都市の絆

福岡市は柳田國男が生まれたところ、遠野市は『遠野物語』の地です。柳田國男の縁で友好の絆を結ぶことができないかと考えていました。本田市長にその思いを伝えたいところ、こころよく応じてくださいました。平成26年8月23日に友好都市の文書に調印をいたしました。これによって、両市町の間で文化、産学の交流が進んでいます。

II. 自律(立)の心を育て

参画と協働の

町づくり

20年間一貫して掲げたまちづくりの目標は、「自律(立)の心を育て、参画と協働の町づくり」でした。

私は人づくりまちづくりの原点は「村は住む人のほんの僅かな気持ちから、美しくもまぶくもなるものだ

といふことを、考へるような機会が私には多かった」(美しき村)という柳田國男の言葉の中にあると思っております。

美しい村を作ろうと思う人が二人と多くなつていくことが、美しい村を作り上げていくのです。中でも「ほんの僅か」という言葉の響きが大好きなのです。全力を込めて努力することは理想ですが、これでは息切れを起こし、私に出来ることではありませんし、他の人にも勧めることはできません。ほんの僅かの気持ちを含めることなら私もできそうに思うのです。

自律(立)とは、自分の立てた規律にしたがつて、ものを考え行動することです。そんな自由で独立した人がまちづくりに参画し、力をあわせて共に働く人が一人でも多くなれば、きっといいまちになると考えました。

町民の4つの願い

まちづくりの出発は、町民の願いに依る行政をすることだと思っております。そして、その願いを次の4点にまとめてみました。

①元気で各方面で活動ができ、病気やけがをしたときは安心してお医者さんに診てもらえること

②働く場所があつて、収入が保障され、そのお金を使って買い物やレジャーを楽しむことができること

③いじめを受けず、差別されず、地域職場、学校等で仲良く集団生活ができること

④よい環境(自然、人的)の中で安心して生活ができること

以上の願いに込めるため、私は「憲法を暮らしに生かす」と言い続けて町政に取り組んできました。そして、私なりに町政分析をおこない、福岡町で当面取り組むものとして、次の面を重視して取り組めばいいのではないかと考え、

1. 科学の心で知を力にした
まちづくり

2. もてなしの心で共に生きる
まちづくり

3. 食育で健康なまちづくり
まちづくり

4. 地産地消で活力を育てる
まちづくり

科学の心で知を力にした

まちづくり

覚悟はしていたのですが、登庁するとたくさん課題が山積していました。来年度の予算編成、公共下水道の推進、もちむぎ食品センターの運営改善などです。

財政、会社経営、下水の処理方法など知らないことばかりです。知識と情報がなければ、きちんと対処できません。

「知を力」には私のためにも必要だったし、住民サービスを向上させるためにも必要でした。住民サービスの中身は「住民のいのちと暮らしを守るため」の知識と情報です。役場に勤める者は常に知を磨き、情報を蓄積する努力をしなければなりません。

そして、小中の全国の学力テストの結果を知つて、町ぐるみで学力向上に取り組まなければならないと思つた。図書館の建設にこだわったのは、図書館が「知を力」にする中心的な役割を果たしてくれると思つたからです。

「知を力」の上に「科学の心で」

を付け加えたのは、福島原子力発電所の事故があったからです。

私は80年の生涯で二つの神話に裏切られました。一つは神風神話です。小学校のころ親からも、先生からも、日本は神国だから、いざという時には神風が吹いて敵をやっつけてくれるので戦争には負けないと教えられてそれを信じていました。

もう一つは原子力安全神話です。原子力は安価、安全だから安心だといわれていたので、あんなに大きな被害が出るとは考えたことがありませんでした。

ものごとは一方だけから見えてはいけない、多面的(科学的)に見ないといけないと気づいたのです。

もてなしの心で共に生きる

まちづくり

資本主義の発展で成熟社会と言われます。そしていま、政治も経済も新自由主義の立場で運営がすすめられています。新自由主義とは、「強い者が勝って当たり前、弱い者は淘汰されてもしかたがない」という弱肉強食の立場です。

ここでは共に生きることよりも競争に勝つことのほうが重視され、絆はずたずたにされています。

まちづくりで大切なのは、あいさつを交わしみんな仲良くすることであり、向こう三軒両隣が助け合って絆を強めることなのです。

食育で健康なまちづくり

福崎町でこの目標を立てたのは、一般的に健康なまちにしようということに加えて、小学生男子が兵庫県で一番メタボ率が高いという数字が出たからです。メタボは成人病になりやすいといわれています。この不名誉な数字を解消するためには、学校だけでなく、まちをあげて取り組まなければならないからです。

他方がいい面では、福崎町の特産品の「もち麦」が美容と健康によいβーグルカンを多量に含んでいるとNHKテレビで放映されたことです。このもち麦を町内でもっともつと普及させ全国に発信していかねければなりません。

地産地消で活力あるまちづくり

地産地消はその土地で収穫した農産物をその地で消費することを指しますが、もっと広くとらえて、福崎町の人、物すべてに光を当て、活用して活力にしていくことです。最近、地方創生といわれ全国的な取り組みとなっています。

辻川山の麓の小さな池にカッパを置き観光客を呼んでいます。こんな工夫をもっと旺盛に展開しなければなりません。

私が最も重視するのは農地や山川の活用です。遊んでいる農地を活用してもっともつと農産物を増産する。その農産物を食べ物がなくて困っている国に供給することです。

首相は開発国に対してお金の支援を約束されますが、食べ物の不足する国には農産物の支援があつてもいいのではないのでしょうか。日本の食料自給率は40%を切っています。これは60%は他国から食料を輸入していることになりました。農地を遊ばせている日本が、世界から食料を輸入すれば、食料の不足している国はますます困るこ

とになります。地産地消も考えて農業を守ることが大切ではないでしょうか。

地産地消をすすめることは福崎町はもちろん、日本を守ることにあり、世界の平和と繁栄に役立つことになっていると思います。

福崎町の取り組みべき課題は、ほかにもたくさんありますが、私は以上の4本の柱が町の可能性を延ばす鍵と考え取り組んできました。

